

早稲田大学ドイツ語学・文学会
 第6回研究発表会研究発表要旨
 (1998年9月19日)

『世界周航記』における自然記述と自然享受

森 貴 史

ゲオルク・フォルスターの『世界周航記』(1778-80)における自然の地誌的・博物誌的記述のなかには、「風景」として描かれた自然の描写が多数存在する。ここで言う「風景」とは、近代的自我の覚醒とともにそれを自然に投影させたもの(ジンメルは「風景の〈気分〉〈Stimmung〉 der Landschaft」と名づけている)で、いわば近代の産物としての「風景」である。フォルスターにとっての「風景」とは、多種多様な自然の事物によって織りなされたさまざまな「コントラスト」を醸し出すひとつの集合的総体としての自然であるが、こうした自然は「未開」で「ロマンティッシュ」にして「心地よい」ものであり、自然研究における新発見を期待させるような豊かさをもってはじめて「絵画的」ならびに「美しい」とみなされる。かれは「風景」をみる喜びを視覚による〈自然享受 Naturgenuß〉と位置づけて、人間の精神と肉体の両方に絶大な活力をあたえるものだと考えた。しかし、かれにとっては視覚以外の感覚もまた不可欠である。自然の風景に対する精妙な視覚的経験に触発されて、視覚の快樂がほかの五感の経験領域へと浸透していくことこそ、フォルスターの〈自然享受〉であるといえよう。『世界周航記』の自然描写を大別すると、自然の事物について個別に詳らかに記載している部分と、さまざまな自然の事物をひとつの総体(「風景」)として叙述している部分に分かれるが、この違いはいわば、個々の対象との密接さを高める〈虫の目〉と、一定の距離をとって広く俯瞰する〈鳥の目〉というべきふたつの視点の差異に基づくものである。そしてこのふたつの視点が交互に入れ替わるといふ視点の変化がもたらすダイナミズムこそ、かれの自然記述に奥行きと多彩さをあたえているものなのである。フォルスターの自然描写とは、従来解釈されてきたように、かれが太平洋南海諸島の住民についての民俗学的・文化人類学および哲学的な考察をみちびくための資料的覚書であるばかりでなく、自然のさまざまな事物・事象を総体として感受する美的享受であると同時に、五感による比較と分類と数量化にもとづいた科学的認識なのであって、しかも、このふたつの方法は相互補完的・一体的に機能している。自然という対象を、あるときは事物それぞれを個別に、またあるときはひとつの総体として分析・情報化し、それによって自然全体を体系的・構造的に把握しようとするフォルスターのこの方法論は、アレクサンダー・フォン・フンボルトの「自然描画 Naturgemälde」の雛形となったといえるだろう。